

2月末、大学生2人が市長インターンシップとして、秘書業務にあたりました。

うち1名は、大学で福祉を学んでおり、将来はケースワーカーとして働きたいという希望を持っている学生でした。そこで「今後の参考に」と市の福祉制度を一冊にまとめた「福祉のしおり」を渡しました。

市長が、その学生に「役所の仕事の感想はどうですか？」と尋ねたところ、「制度がたくさんあって、覚えきれぬか不安です」と答え、市長から次のようなアドバイスがありました。

## 暮らしには完成がない

「制度がたくさんあって、大変だ」という感想だったけれど、福祉の現場では、相手の目を見て、うなずいて、とにかく相手の話をじっくり聞くことが一番大切です。じっくり話を聞いて、法律や制度で考えるのではなく、「この人のためにできることは何か」を一緒に考えることです。

私は、約30年間、子どもや高齢者に関わる仕事をしてきました。その中で、感じたことをまとめた表があります。

時間に追われない国	時間に追われる国
家庭、地域、子どもや老人のいる 暮らしの場 ⇒生活集団	学校、病院、企業、軍隊など 働く人のいる仕事の場 ⇒目的集団
○いろいろな人々が一緒に暮らす ○遠回りもよし ○プロセスも楽しむ ○存在そのものが大切 ○形容詞の世界 ・みんな正解 ・目に見えないものにも価値がある ・自然(不揃い・多様)を大切にする ○いいところを取り入れると悪いところが必ずついてくると思っている ○いつも未完成	○同質の人たちを集める ○最短距離を最高の効率でいく ○結果を求められる ○能力に価値がある ○数値の世界 ・正解がある ・目に見えるものを評価 ・人工物(規格品)を必要と感じる ○悪いところを切り捨てるといい所になると思っている ○完成解決をめざす

小さな子どものころ、私たちは、左側の「時間に追われない国」の住民でした。大きくなるにつれ、訓練をして、右側の「時間に追われる国」で暮らすようになります。

昔は、平均寿命が長くなかったから、「時間に追われる国」の住人のまま死んでいったけれど、今は、長寿社会になって、私たちは再び、「時間に追われる国」から「時間に追われない国」に帰っていく必要が出てきました。

でも、長い時間をかけて身に付けた「時間に追われる国」の観念を取り払うことはなかなか難しく、いつまでたっても「時間に追われない国」になじめない人が多いのです。

暮らしには完成がありません。例えば、「高校に受かった」「昇進した」「結婚した」が、人間の完成でしょうか？ まちづくりにしても同じです。建物を建てたら完成でしょうか？ 建設した数十年後には、メンテナンスが必要になります。そのとき、メンテナンスをするのか、統廃合をしていくのか…。完成がありません。

一方、会社には完成があります。期限を決め、完成を目指して進んでいきます。その考えを完成がない地域や生活に持ち込むから、ずれていってしまうのです。

また、介護施設を作るとき、保育園、幼稚園などを作るとき、これまで日本中どこでも、預ける側の立場、すなわち「時間に追われる国」の住人の立場で、預ける側が便利のように、都合の良いように作ってきてはいないでしょうか。預けられる側＝「時間に追われない国」に住む高齢者や子どもの立場になって、いかに快適か、どうしたら楽しく過ごせるかかについて考えているのでしょうか。

介護施設で過ごす高齢者は、寂しいのです。その寂しさを少しでも減らし、少しでも楽しい空間に、時間にするにはどうしたら良いか、私たちは思いを馳せることが大切だと思っています

これから、あなた（インターンシップ生）が、福祉の現場に携わるとき、「時間に追われる国」の価値観で相手に接していると、イライラしたり、思うようにいかなかったりすることも多いでしょう。最初から制度に当てはめて考えるのではなく、まず、相手の目を見て、にっこり笑って、じっくり話を聞くことを忘れずにできれば、あなたは素晴らしいケースワーカーになれると私は思います。

～市長の話を聞いて～

私が、「今後の勉強になるだろう」と思って、「福祉のしおり」をインターンシップ生に渡したのですが、彼女が「やっていけるか不安です」と打ち明けてくれたとき、申し訳ないことをしたなと思いました。

日常生活でも、良かれと思ってやったことが、実は、相手のニーズとずれていたことは、よくあります。私は、相手の答えを勝手に想像して、先回りしてしまいがちなのですが、じっくりと「傾聴」することを心がけていきたいと思いました。